# クラシック音楽と心の余裕

医療法人ユベンシア　いまにしクリニック理事長
今西 宏明

東京フィルゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第21回は、法人賛助会員として、またパートナー会員としてもご家族で東京フィルをご支援くださっている医療法人ユベンシア いまにしクリニック理事長の今西宏明様。外科手術に臨む際の心構えに、オーケストラ奏者と通じるものを感じるという今西様に、クラシック音楽でリフレッシュする時間の大切さについて綴っていただきました。

私がまだ駆け出しの外科医だった頃、専門が肝胆膵外科だったので手術時間は大変長く、術後管理にも多くの時間をかけ対応していました。心理的肉体的にもストレスがあり心のゆとりもなかったことを憶えています。ゆとりがなくなると、仕事の効率も上がらないものです。

そんなとき、ふと「ショーシャンクの空に」という映画を観ました。主人公が冤罪で過酷な刑務に服するなか、モーツァルトの『フィガロの結婚』を刑務所中に響き渡るようにレコードをかけるシーンがあります。音楽により得も言われぬ安らぎが受刑者達に与えられ、それを観ていた私も大きな安堵感を覚えました。人間どんな状況にあっても心に余裕を持つことが大切であると感じた場面でした。またクラシック音楽の影響力を認識させられ、私自身も気分転換とともに本当にリフレッシュできた瞬間でした。

以来、手術中にクラシック音楽を流すこともありました。それは緊張が解ける瞬間の私に落ち着きと安心感を与えてくれるからです。バッハの「平均律クラヴィーア曲集」やモーツァルトの『魔笛』から秩序と調和の美しさを感じます。ベートーヴェンの「交響曲第九番」やチャイコフスキーの『白鳥の湖』は情熱と感動の力を与えてくれます。これらの音楽は私の手術のパートナーとなりました。

チャイコフスキーの『白鳥の湖』のCDジャケット。特に第2幕の曲が気に入って聴いていました。最近はクラシックバレエも観に行くようになりました

親交のあるフルーティストから手ほどきを受ける筆者

現在は開業医となり手術をする機会は減りましたが、大きな手術に追われていた頃のことを思い返すことがあります。手術は緊張と集中の連続です。緊張は同じレベルを保つことは困難で緊張が解ける合間があります。おそらくオーケストラも同じように張りつめる部分と和らぐ瞬間があるものと思います。手術とクラシック音楽はその点で近いと感じながら生演奏を拝聴しています。

ここ数年コロナ禍で感染リスクを避けるため様々な業種が影響を受けました。私ども医療機関も、患者さんが安心して来院できない時期がありました。クラシックコンサートはまさに最も厳しい状況があったと思います。クラシック音楽界を今後も一層盛り上げて頂くために微力ながら東京フィルハーモニー交響楽団をご支援させて頂いております。

ときおりコンサートを拝聴し非日常の世界に触れることで、私どもは心の余裕を忘れないように憩いの時間を過ごさせて頂きたく思います。

今西宏明 (いまにし・ひろあき)
1961年京都市生まれ、浜松医科大学医学部卒業。東京大学肝胆膵外科・人工臓器移植外科助手。ミシガン大学移植外科客員研究員。東京大学大学院より医学博士号取得。国立国際医療研究センター国府台病院外科などを経て現在、医療法人ユベンシア　いまにしクリニック理事長。